

最近の食肉をめぐる状況

(2025年3月報告)

【 項 目 】

- I 牛肉価格の動向
- II 豚肉価格の動向
- III 消費・販売の動向

最近の食肉をめぐる状況（2025年3月報告）

公益財団法人 日本食肉流通センター

当センターでは、センター公表の部分肉価格情報及び食肉関連の情報を分析し、最近の食肉をめぐる状況について報告しています。

今回は、2021年以降の国産牛肉・豚肉を中心とした部分肉価格の動向と食肉の消費・販売の動向について報告します。

I 牛肉価格の動向

和牛、交雑牛及び乳牛について、部分肉のうちロイン、ヒレ、バラ、ウチモモの4つの主要な部位の取引価格と枝肉の卸売価格に着目し、それらの価格の動きを比較しました。比較には、価格を指数化して相互の比較をしやすくし、用いた部分肉の価格データは、当センターが月ごとに取りまとめている首都圏の部分肉価格のうち重量中央値を用いました。また、枝肉卸売価格は東京食肉市場の価格を用いました。

価格の指数化については、和牛チルド「4」、交雑牛チルド「3」、乳牛チルド「2」ごとに2022年を基準（100）として各月の価格を指数（以下「価格指数」という。）にしました。なお、「」内の数字は肉質等級を表しています。

1 和牛

和牛の需要動向について、枝肉の価格指数の動きでみると、新型コロナウイルス感染症による経済活動への初期の影響や輸出の停滞からの回復に伴って、2020年後半には以前の水準に回復して好調に推移しましたが、2021年後半から、物価の上昇による消費者の生活防衛意識の高まりにより低下傾向で推移するようになりました。その後、ようやく2024年後半から回復する動きがみられるようになりました。

この間の部分肉の需要動向について部位別の価格指数で見ると、部位によっては枝肉とは異なる動きがみられました。（図1）

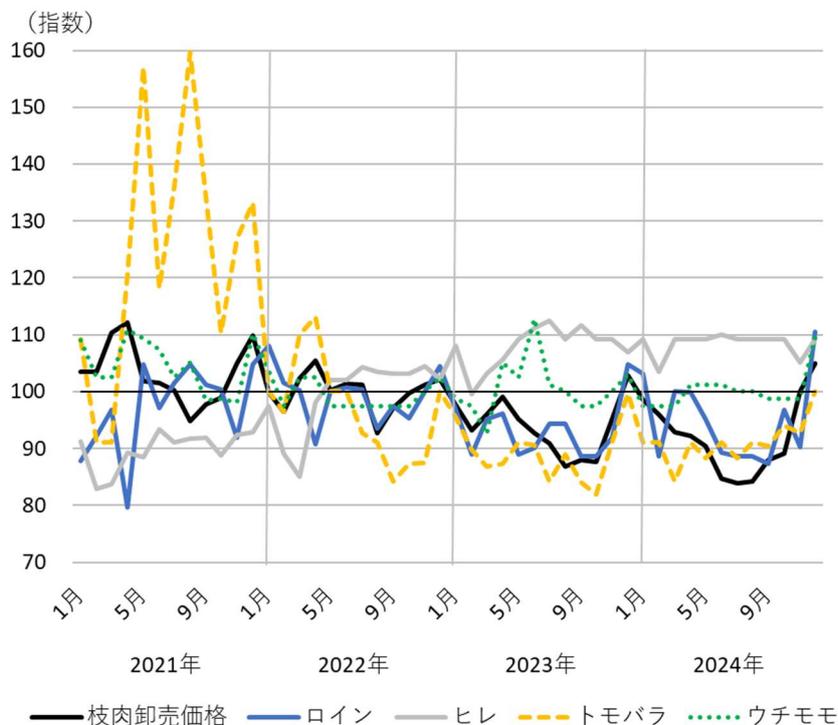
図1 和牛の価格指数(首都圏)

ロインは、輸出の主要部位となっていますが、国内需要では、高級な部位であるため、消費者の節約志向の影響を受けて低迷し、特に、2023年及び2024年には価格指数が90を切る月がみられるようになりました。

ヒレも代表的な高級部位ですが、2022年からホテルやレストラン等の営業が本格化してきたことから需要が急速に回復して、同年後半からは価格指数が100を超えて推移しました。この間、食肉事業者から、ヒレが不足しているとの報告がありましたが、直近では品薄は落ち着いているようです。

トモバラは、焼き材等として家庭内外での需要が根強く、全体としてコロナの影響が残る2021年でも強い需要があり、価格指数も100を大きく超えて推移しました。しかし、その後、需要も一巡し、食肉業界では荷余り感があるとの報告も出はじめて2022年半ばから100を割り込み、低迷して推移しています。

ウチモモは、赤身を特徴とし価格は比較的安く、需要が堅調であったことから、枝肉の低迷が顕在化する2023年以降でも価格指数は安定的な推移となりました。



- 注 1.部分肉の価格指数=各月の重量中央値/2022年の重量中央値×100
 2.枝肉卸売価格の価格指数=各月の平均価格/2022年の平均価格×100
 3.枝肉卸売価格は、農林水産省「畜産物流通統計」東京市場の和牛去勢A4である。

2 交雑牛

交雑牛の需要動向について、枝肉の価格指数でみると、消費者の生活防衛意識の高まりの影響から、2023年に入ると指数は100を割って推移しましたが、和牛と異なり同年年末から回復し100を超えて推移しています。

図2 交雑牛の価格指数(首都圏)

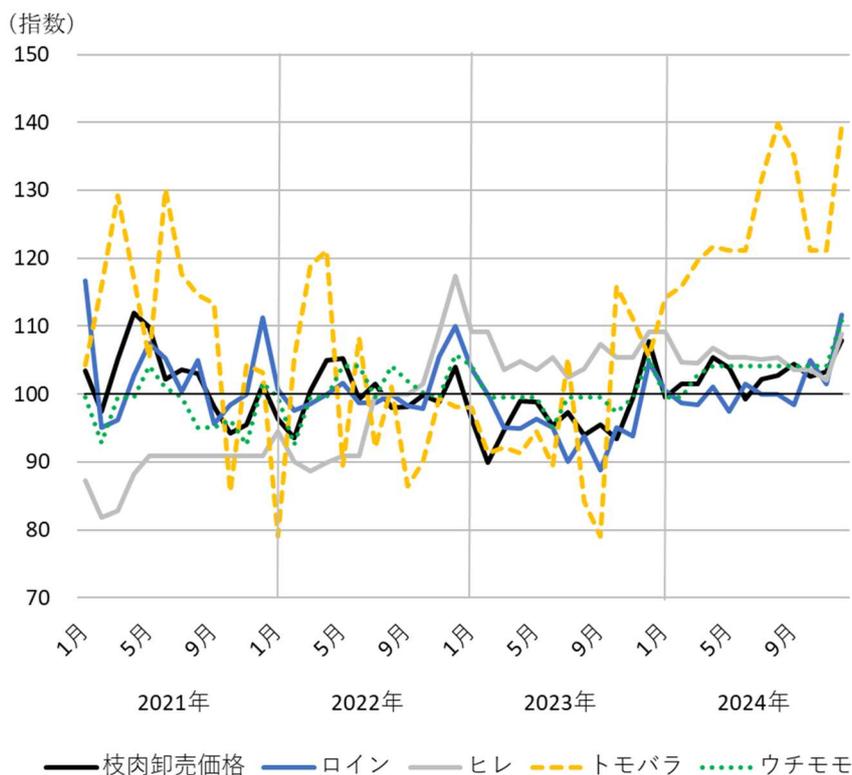
部分肉の価格指数の動向をみると、ロインは、2023年から低下傾向となりましたが、和牛に比べて手頃な価格帯なことから需要は手堅く、2024年には指数が100前後の水準に回復して推移しました。

(図2)

ヒレは、和牛と同様に外食需要の回復に伴って価格指数は上昇傾向となり、2023年から100を大きく超えて推移しました。

トモバラは、和牛と同様に需要が強く2021年前半の価格指数は高値でしたが、需要も一段落して同年後半から下降傾向となりました。2023年末からは和牛のトモバラの低迷が続く一方で、輸入トモバラの輸入量の減少や価格上昇の影響もあって交雑牛トモバラの引合いが強まり、価格指数は大きく上昇しています。

ウチモモは、安定した需要に支えられて価格指数も安定して推移してきましたが、2024年半ばからは、やや高い水準で推移しています。



- 注 1.部分肉の価格指数＝各月の重量中央値/2022年の重量中央値×100
 2.枝肉卸売価格の価格指数＝各月の平均価格/2022年の平均価格×100
 3.枝肉卸売価格は、農林水産省「畜産物流通統計」東京市場の交雑牛去勢 B3 である。

3 乳牛

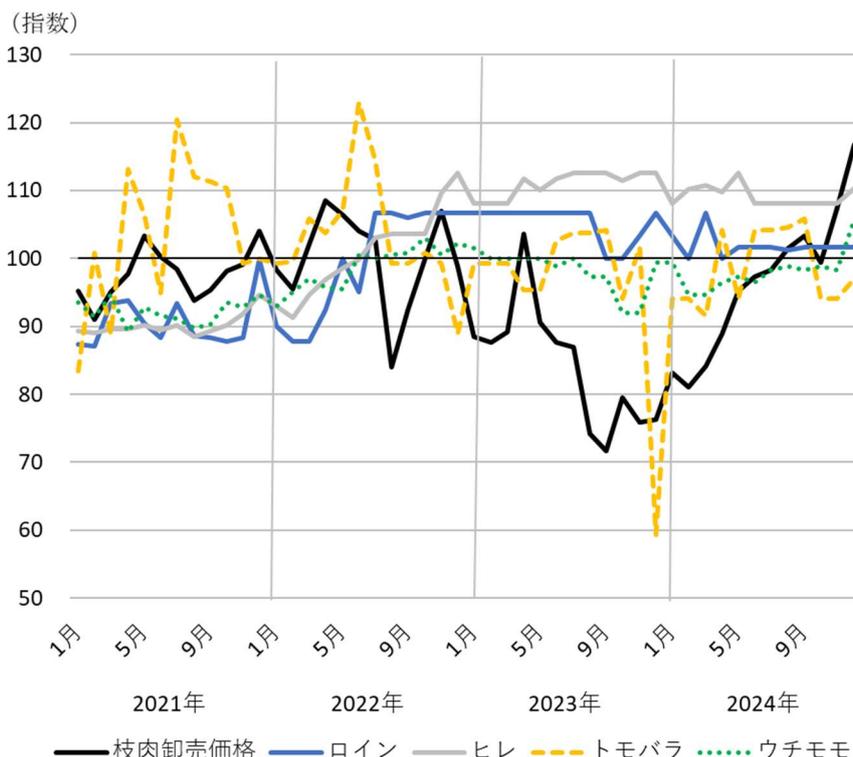
乳牛の需要動向について、枝肉の価格指数で見ると、2023年に入り低下傾向となり同年後半には大きな落ち込みとなりました。しかし、2024年になると価格指数は回復傾向に転じ、同年年末に価格指数は116.9と高い水準となりました。

図3 乳牛の価格指数(首都圏)

部分肉の価格指数の動向をみると、ロインは、和牛や交雑牛よりも手頃な価格帯であることから輸入品の代替となり、2022年半ばから需要が戻って価格指数は上昇傾向となり、100を超えて安定した水準で推移しています。(図3)

ヒレは、外食需要の回復に伴って2021年の年末から価格指数は上昇傾向となり、2022年7月以降は100を超えて高い水準で推移しています。食肉事業者からは、乳牛のヒレなどは値頃感があってもっと欲しい商品ですが、乳去勢牛の出荷頭数が年々減少して手に入りにくくなっているとの報告が多くありました。

トモバラは、2021年半ばから2022年半ばまで輸入トモバラの価格変動の影響もあって上下しながらも価格指数は高い水準となりましたが、その後やや水準を下げたものの、安定した需要に支えられ、価格指数は100前後の横ばい傾向で推移しています。



注 1.部分肉の価格指数=各月の重量中央値/2022年の重量中央値×100

2.枝肉卸売価格の価格指数=各月の平均価格/2022年の平均価格×100

3.枝肉卸売価格は、農林水産省「畜産物流通統計」東京市場の乳牛去勢 B2 である。

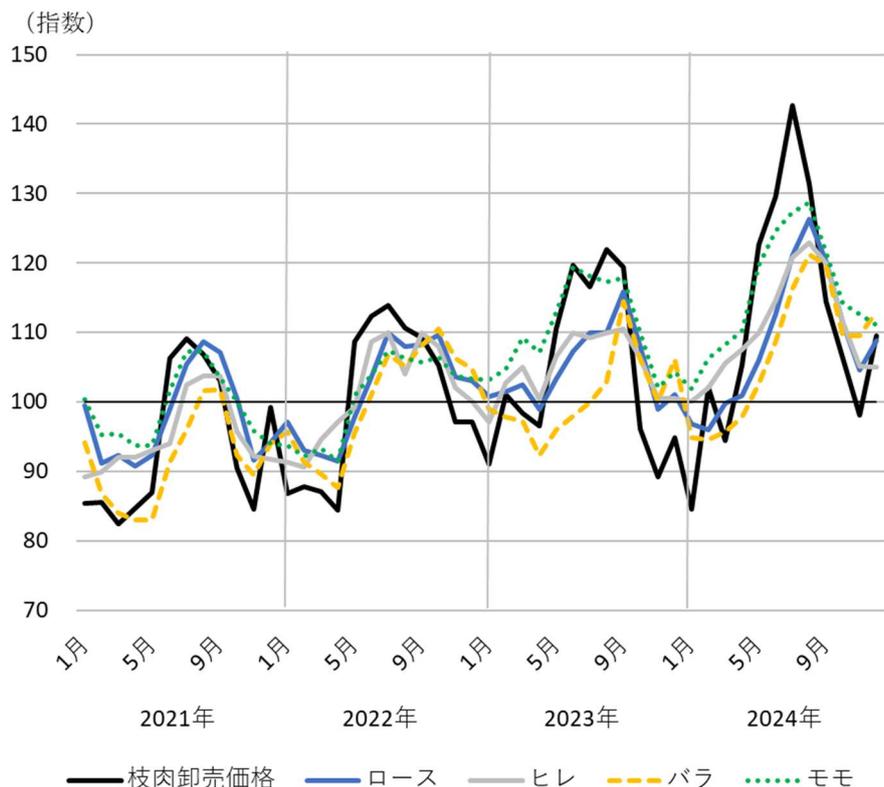
ウチモモは、経済活動の再開により2021年から価格指数は上昇となり、2022年6月には100を超えました。その後、価格指数はやや下げましたが安定した需要を反映して横ばいで推移してきました。

Ⅱ 豚肉価格の動向

国産豚肉について、部分肉のうちロース、ヒレ、バラ、モモの4つの主要な部位の取引価格と枝肉の卸売価格に着目し、牛肉と同様に指数化して動向を追いました。部分肉の価格データは、当センターの国産豚肉チルド「I」首都圏の重量中央値を用い、枝肉卸売価格は、東京食肉市場の「上」の価格を用いました。なお、「I」は、格付が「極上」及び「上」の枝肉から生産された部分肉であることを表しています。

図4 国産豚肉の価格指数(首都圏)

国産豚肉の
 場合は、コ
 ロナ時は巣
 ごもり需要
 により需要
 が増えるとい
 う影響があ
 りましたが、
 その後は、さ
 らに輸入豚
 肉の価格上
 昇や国内の
 出荷頭数が
 減少したこと
 により、枝
 肉の価格指
 数は、夏場
 に高値とな
 るという季
 節変動を繰
 り返しながら
 上昇傾向で
 推移してき
 ました。
 2024年7月
 には価格指
 数142.7（枝
 肉価格で8
 31円/kg）
 まで跳ね上
 がりました。
 （図4）



- 注 1.部分肉の価格指数＝各月の重量中央値/2022年の重量中央値×100
 2.枝肉卸売価格の価格指数＝各月の平均価格/2022年の平均価格×100
 3.枝肉卸売価格は、農林水産省「畜産物流通統計」東京市場の上である。

部分肉の価格指数をみると、いずれの部位も枝肉と同じ動きで推移してきました。しかし、この間、食肉事業者からは、ロースは売りにくく、場合によっては在庫を抱えてしまう一方で、モモは不足して加工用在庫が確保できないとの部位による需要の違いがあることについて報告が多くありました。

このような需給動向の違いを反映して、同じような価格指数の動きをしていたロースとモモは、2023年に入ると、モモの価格指数がロースを上回って推移するようになっていきます。国産豚肉の場合は、短期での食肉市場の卸売価格が卸事業者の販売価格に反映される価格形成が主流ですが、その中にも部位ごとの評価が変わってきていることを示す動きとなっています。

2024年7月に枝肉の価格指数（142.7）が大きく跳ね上がったのに対し、同月のロース（価格指数121.0）、ヒレ（120.8）、バラ（116.3）、モモ（127.4）の上昇幅はかなり抑えられた水準となっています。また、逆にその前後の低下した時も同様に下降幅は抑えられています。

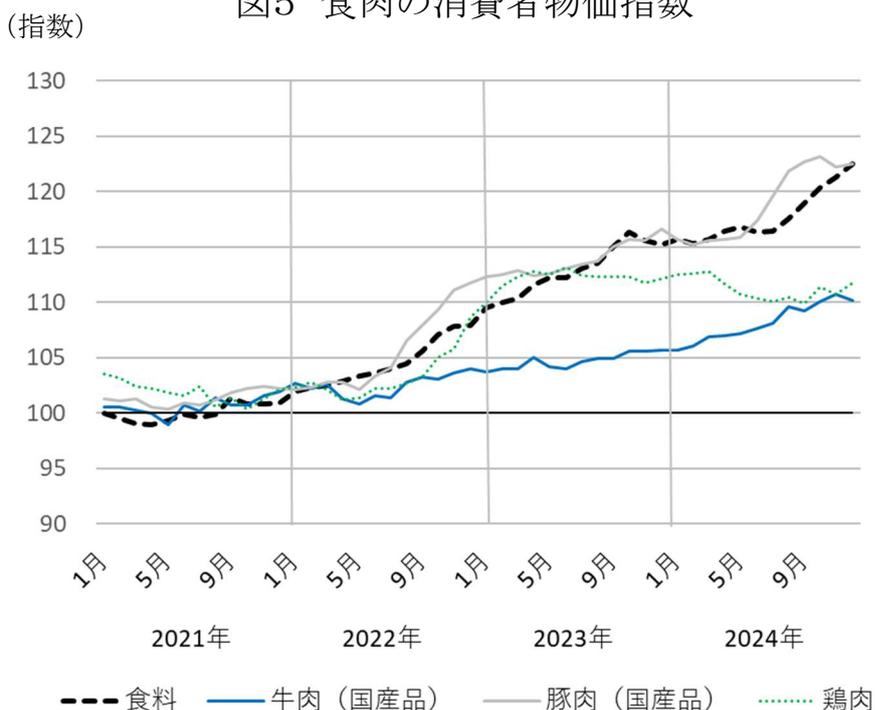
Ⅲ 消費・販売の動向

1 食肉関連の消費者物価指数の動向

食肉の小売価格の動向

は、その消費に動きに大きく影響するため、総務省が公表している消費者物価指数（2020年を100とした指数）のうち食肉関連の指数について、Ⅰ及びⅡと同じ期間中の動きをまとめました。（図5）

図5 食肉の消費者物価指数



資料:総務省「消費者物価指数」(全国)より作成。

注:指数は、2020年平均を基準(100)としている。

食料の消費者物価指数は、2022年から顕著な上昇傾向となり、さらに2024年後半からは傾向を強めて上昇し、同年12月には122.5となりました。

牛肉（国産品）の指数についても食料と同時期に上昇傾向となりますが、その上昇割合は抑えられて緩やかな上昇となっており、食料や豚肉より低い指数で推移し、2024年12月には110.2となり、鶏肉と同水準となりました。

豚肉（国産品）の指数は、食料と同様の水準で上昇し、2024年12月には122.5と食肉の中で最も高い指数となりました。

鶏肉の指数も上昇傾向で推移しますが、他の食肉と異なり2023年10月頃から緩やかな低下に転じ、2024年12月には111.8となりました。

以上のことから、この期間中は、食肉の中では、鶏肉価格の動きが消費者にとって最も身近に感じるものとなり、豚肉価格の動きは食料全般と同じように高くなったと感じさせるものとなったと言えます。

2 家計消費の動向

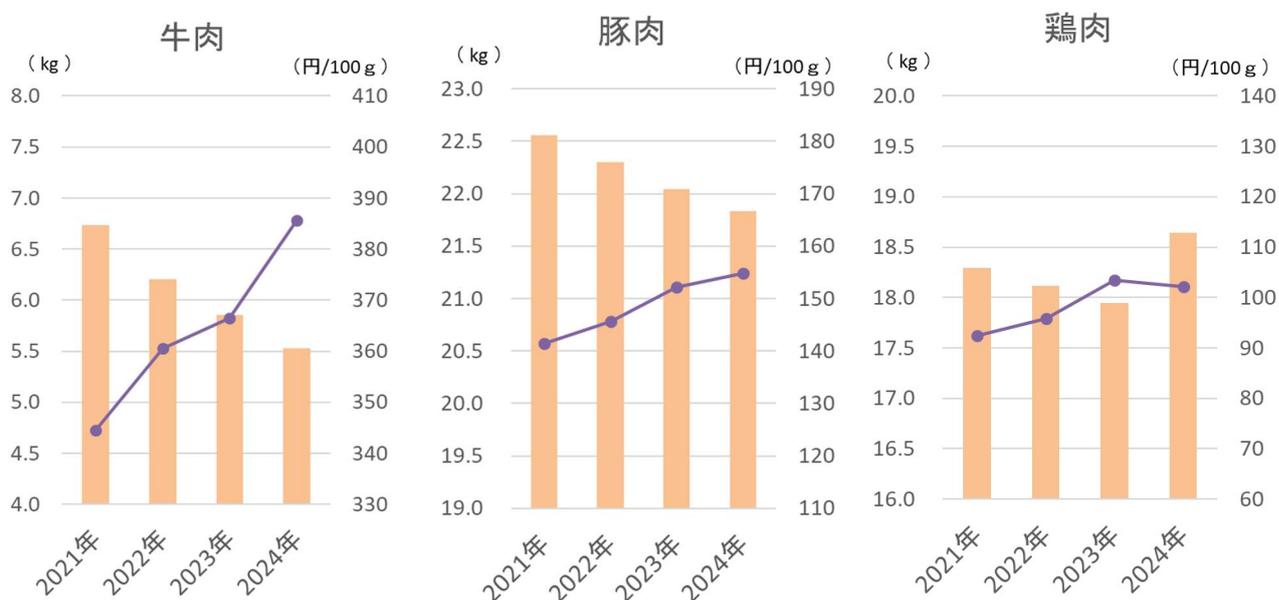
家庭における食肉の購入数量と価格の動きについて、総務省が公表している家計調査から追うことができます。Ⅰ及びⅡと同じ期間中の食肉の種類別購入数量・購入金額をまとめました。（図6、表1）

購入数量では、牛肉、豚肉とも毎年減少し、2024年は2021年に対し、それぞれ82.1%、96.8%となり、特に牛肉の減少割合は大きなものとなりました。一方、鶏肉は2022年、2023年に前年に比べて減少したものの、2024年には増加し、2021年対比で101.9%と増加しました。

購入価格は、1の消費者物価指数の動きとも連動した動きとなりますが、牛肉は元々他の食肉よりも高いことに加えて価格が上昇（2024年／2021年比：112.0%）したことから購入数量の減少につながったことがうかがえます。豚肉についても牛肉よりも低い水準ですが、価格上昇（同比：109.5%）があり、購入数量が減少している状況となっています。鶏肉は、2024年に購入価格は抑えられたこともあり、2024年の購入数量は大きく伸びました。

この結果、この期間の家計消費における支出金額の伸びは、鶏肉が最も高く（112.5%）、続いて豚肉（106.0%）となり、牛肉は減少となりました（91.9%）。

図6 食肉の購入数量・購入価格



資料：総務省「家計調査」の二人以上の世帯のデータにより作成。

■ 購入数量
● 購入価格

表1 世帯当たり年間の購入数量，支出金額及び購入価格

	2021年	2022年	2023年	2024年	2021年比 (2024/2021)
食料支出金額 (円)	952,812	982,661	1,038,653	1,079,228	113.3%
生鮮肉					
購入数量 (g)	52,227	51,089	50,193	50,350	96.4%
支出金額 (円)	78,229	78,259	79,811	80,658	103.1%
購入価格 (円/100g)	150	153	159	160	106.9%
牛肉					
購入数量 (g)	6,738	6,202	5,853	5,529	82.1%
支出金額 (円)	23,210	22,356	21,449	21,321	91.9%
購入価格 (円/100g)	344	360	366	386	112.0%
豚肉					
購入数量 (g)	22,554	22,297	22,041	21,835	96.8%
支出金額 (円)	31,892	32,487	33,553	33,818	106.0%
購入価格 (円/100g)	141	146	152	155	109.5%
鶏肉					
購入数量 (g)	18,295	18,117	17,949	18,643	101.9%
支出金額 (円)	16,915	17,372	18,558	19,033	112.5%
購入価格 (円/100g)	92	96	103	102	110.4%

資料：総務省「家計調査」の二人以上の世帯のデータにより作成。

(問合せ先)

公益財団法人日本食肉流通センター

情報部 安藤

電話：044-266-1172